

資料

別紙2 回答作成のための用紙

肢体不自由特別支援学級の指導に関する調査

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

専門研究 B 「肢体不自由のある児童生徒の障害特性に配慮した教科指導に関する研究－表現する力の育成をめざして－」

研究代表者 長沼俊夫

本研究では、肢体不自由のある児童生徒の教科指導において表現する力の育成を図るという観点から、指導法、教材教具、配慮・工夫点等の関連資料の収集整理と蓄積に取り組むとともに、特別支援学校及び特別支援学級の実態を把握し、児童生徒一人一人の実態に応じた適切な指導の在り方を提案することを目的としております。こうした研究課題において本調査では、小・中学校に設置される特別支援学級(肢体不自由)の指導の実態を把握し、教科指導に関する課題を明らかにすることを目的としております。

調査により得られた情報は、本研究のための資料として用い、その研究成果は学会や報告書、Web サイト等で公表する予定です。ご回答いただいた情報は数値化等の処理を行い、個人名や学校名は匿名とするため、個人情報が増えることは一切ありません。また、回収した調査結果は厳重に保管し、研究目的以外で使用することは一切ありません。

本調査の趣旨をご理解いただき、下記の同意書に同意の上、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

《同意書》

ご同意の上、本調査にご協力いただける方は、以下の 同意する を○で囲んでください（アンケートサーバー上ではクリックしてください）。[必須]

同意する

同意しない

本調査は、貴校に設置する肢体不自由特別支援学級を担任する教諭に回答をお願いいたします。

* 「○」または「□」をクリックして「選択」してください。

* 小さな□には、数字(半角)をご記入ください。

* 大きな□には、文字を入力してください。

* 平成 22 年 5 月 1 日現在の状況でご回答ください

1. 学校に関する基本情報

1-1 学校名を都道府県からお書きください。[必須]

1-2 小学校または中学校のいずれを○に記入してください。[必須]

小学校

中学校

1-3 ご回答いただいた方のお名前をお書きください。

1-4 貴校の通常の学級について

1-4-1 通常の学級数をお答えください(半角数字)。

学級

1-4-2 通常の学級に在籍する児童または生徒(以下、児童生徒)数をお答えください(半角数字)。

人

1-5 貴校に設置される特別支援学級および通級による指導教室について

1-5-1 設置される特別支援学級の障害種別および通級による指導教室について、□に記入してください（複数回答可）。通級による指導教室は障害種別を問わず、有無でお答えください。

[必須]

- 肢体不自由
- 知的障害
- 身体虚弱・病弱
- 弱視
- 難聴
- 言語障害
- 自閉症・情緒障害
- 通級による指導教室

1-5-2 上の設問で「設置される学級に在籍する」児童生徒数を数字（半角）でお答えください。設置されていない学級は空欄をお願いします。

肢体不自由	<input type="text"/>	人
知的障害	<input type="text"/>	人
身体虚弱・病弱	<input type="text"/>	人
弱視	<input type="text"/>	人
難聴	<input type="text"/>	人
言語障害	<input type="text"/>	人
自閉症・情緒障害	<input type="text"/>	人
通級による指導教室	<input type="text"/>	人（通級する児童生徒の総数）

2. 肢体不自由特別支援学級（以下、学級）について

2-1 学級に配属される教職員等について

2-1-1 学級に配属される教職員等について、該当の方がいる場合は□に記入してください（複数回答可）。[必須]

- 常勤の教員
- 非常勤の教員
- 教員以外（支援員、介助員など）

2-1-2 上の設問で「配属される教職員」の人数を数字（半角）でお答えください。配属されていない教職員は空欄をお願いします。

常勤の教員	<input type="text"/>	人
非常勤の教員	<input type="text"/>	人
教員以外（支援員、介助員など）	<input type="text"/>	人

2-1-3 上の設問での「常勤の教員」の方の**教職経験年数**をお答えください。該当の教員が複数いる場合は、1人目、2人目と該当者別に数(半角)をお答えいただき、残りの欄は空欄にしてください。常勤の教員が6名以上配属されている場合は、教職経験年数が多い順に6名についてお答えください。

常勤の教員 1人目	<input type="text"/>	年目
常勤の教員 2人目	<input type="text"/>	年目
常勤の教員 3人目	<input type="text"/>	年目
常勤の教員 4人目	<input type="text"/>	年目
常勤の教員 5人目	<input type="text"/>	年目
常勤の教員 6人目	<input type="text"/>	年目

2-1-4 上の設問での教職経験年数の内、**特別支援教育(特殊教育)経験年数**に上記と同様の方法でお答えください。特別支援教育経験とは、特別支援学校または特別支援学級、通級による指導での教職経験です。

常勤の教員 1人目	<input type="text"/>	年目
常勤の教員 2人目	<input type="text"/>	年目
常勤の教員 3人目	<input type="text"/>	年目

常勤の教員 4 人目 年目
常勤の教員 5 人目 年目
常勤の教員 6 人目 年目

2-1-5 さらに上の設問での特別支援教育(特殊教育)経験年数の内、**肢体不自由教育経験年数**について、同様にお答えください。

常勤の教員 1 人目 年目
常勤の教員 2 人目 年目
常勤の教員 3 人目 年目
常勤の教員 4 人目 年目
常勤の教員 5 人目 年目
常勤の教員 6 人目 年目

2-1-6 常勤の教員の内、特別支援学校教員免許を所持している方の人数(半角)をお答えください(該当者がいない場合は、「0」をご記入ください)。

人

2-2 肢体不自由特別支援学級の設置状況について

2-2-1 学級は開設して何年目ですか。数字(半角)をお答えください。

年目

3. 肢体不自由特別支援学級に在籍する児童生徒の実態について

3-1 児童生徒の実態について

※ ひとりの児童生徒については、最も近いと思われる項目にカウントしてください。同一の児童生徒を複数の項目にカウントしないようにお願いします。

3-1-1 **日常的な会話(やりとり)**について、該当する項目の児童生徒の人数をにお答えください。該当する児童生徒がない項目には、「0」を記入してください。また、その他の場合は、具体的に記述してください。

- ・日常的な会話ができる
- ・日常的な会話が少しはできる
- ・会話はほとんどできない
- ・その他

人
 人
 人
 人

3-1-2 **ひらがなを読むこと**について、該当する項目の児童生徒の人数をにお答えください。該当する児童生徒がない項目には、「0」を記入してください。また、その他の場合は、具体的に記述してください。

- ・ひらがなで書かれた文章を読むことができる
- ・ひらがなを少しは読むことができる
- ・ひらがなを読むことはできない
- ・その他

人
 人
 人
 人

3-1-3 **ひらがなを書くこと**について、該当する項目の児童生徒の人数をにお答えください。該当する児童生徒がない項目には、「0」を記入してください。また、その他の場合は、具体的に記述してください。

- ・ひらがなで日記など文が書ける
- ・ひらがなを少しは書くことができる
- ・ひらがなを書くことはできない
- ・その他

人
 人
 人
 人

3-1-4 **移動する方法について**該当する項目の児童生徒の人数を にお答えください。該当する児童生徒がいない項目には、「0」を記入してください。また、その他の場合は、具体的に記述してください。複数の項目に該当する場合は、学校内で主とする移動手段をひとつお答えください。

- ・ひとりで歩ける
- ・杖や歩行器などを使えば歩ける
- ・手をつないで歩ける
- ・車いすを自分で操作して移動する
- ・車いすを介助受けて移動する
- ・その他

<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人

3-1-5 **食事について**該当する項目の児童生徒の人数を にお答えください。該当する児童生徒がいない項目には、「0」を記入してください。

- ・ひとりで食べられる
- ・ひとりで食べるが部分的な介助が必要
- ・自分でできる部分もあるが、おおむね半分以上は介助が必要
- ・全面的に介助が必要

<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人

3-1-6 **排泄について**該当する項目の児童生徒の人数を にお答えください。該当する児童生徒がいない項目には、「0」を記入してください。

- ・ひとりでできる
- ・ひとりでできるが部分的な介助が必要
- ・自分でできる部分もあるが、おおむね半分以上は介助が必要
- ・全面的に介助が必要

<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人

4. 肢体不自由特別支援学級に在籍する児童生徒の学習について

※ **ひとりの児童生徒については、最も近いと思われる項目にカウントしてください。同一の児童生徒を複数の項目にカウントしないようにお願いします。**

4-1 児童生徒の学習の内容について

4-1-1 児童生徒が学習する内容は、主に以下のどの教育課程に基づいていますか。該当する項目の児童生徒の人数を にお答えください。該当する児童生徒がいない項目には、「0」を記入してください。

- ・当該学年の教科を中心に学習している
- ・下学年の教科や知的障害特別支援学校の教科等を中心に学習している
- ・知的障害特別支援学校の教科、領域を併せた内容を中心に学習している
- ・自立活動の指導内容を中心に学習している

<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人

4-2 交流及び共同学習の状況について

4-2-1 全授業時数の内、交流学級との交流及び共同学習をどのくらい行っていますか。該当する項目の児童生徒の人数を にお答えください。

- ・8割以上の時間を交流及び共同学習している
- ・5割から8割の時間を交流及び共同学習している
- ・3割から5割の時間を交流及び共同学習している
- ・3割以下の時間を交流及び共同学習している
- ・特定の行事以外では交流及び共同学習はしていない

<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人
<input type="text"/>	人

4-2-2 交流学級との交流及び共同学習で実施している学習活動を多い順に3つまでお答えください。その他の場合は、に具体的な内容を記述してください。[必須]

- 国語、算数（数学）
- 生活、理科、社会、外国語
- 音楽
- 図画工作（美術）、家庭（技術・家庭）
- 体育（保健体育）
- 総合的な学習の時間
- 道徳、学級活動（給食を含む）
- 委員会、係活動、クラブ活動など
- 学校行事
- ほとんどの教科等で交流及び共同学習を実施している
- その他

4-3 自立活動の指導について

4-3-1 自立活動の指導の時間を設定していますか。該当するものを選んでください。その他の場合は、具体的に記述してください。[必須]

- 設定している
- 特に設定していない
- その他

4-3-2 上の設問で「設定している」を選んだ方におたずねします。自立活動の指導の時間を週に何単位時間設けていますか。数字(半角)でお答えください。学級の児童生徒が複数いて、個人により時間数が異なる場合は、最多の時間数をお答えください。

単位時間/週

4-3-3 自立活動の指導の時間だけではなく「教科等の中で行う自立活動に関する指導」も含めて、特に重要視している内容をお答えください(複数回答可)。[必須]

- 「健康の保持」に関すること
- 「心理的な安定」に関すること
- 「人間関係の形成」に関すること
- 「環境の把握」に関すること
- 「身体の動き」に関すること
- 「コミュニケーション」に関すること

4-4 教科書や副教材の使用について

4-4-1 教科書、副教材（ドリルやプリント教材など）の使用状況について主に該当する内容を選んでください。学級の児童生徒が複数いて、個人により異なる場合は、該当する項目にその対象となる児童生徒の数をお答えください。該当する児童生徒がない項目には、「0」を記入してください。その他の場合は、具体的に記述ください。

- ・当該学年の教科書と副教材を使用している 人
- ・下学年の教科書と副教材を使用している 人
- ・特別支援学校知的障害者用の教科書（☆本）を使用している 人
- ・学校設置者の定める教科用図書（学校教育法附則第9条による教科用図書）を使用している
- ・個別に作成した副教材を中心に使用している 人
- ・デジタル教科書や拡大教科書を使用している 人
- ・その他 人

4-4-2 教科書や副教材を使用するにあたっての課題などについてお答えください(自由記述)。

4-5 児童生徒の障害の実態に合わせた補助具や補助的手段の学校における活用について

4-5-1 移動のための補助具や補助的手段として活用しているものをお答えください(複数回答可)。

その他の場合は、具体的に記述してください。[必須]

- 車いす(手動、電動)
- 松葉杖やクラッチ
- 歩行器
- 手をつなぐ
- 手すり
- 階段昇降機
- エレベーター
- スロープ
- 特になし
- その他

4-5-2 姿勢を安定させるための補助具や補助的手段で活用しているものをお答えください(複数回答可)。その他の場合は、具体的に記述してください。[必須]

- 机、いす(市販品、手作りも含む)
- クッションチェア、プロンキーパー(座位や特定の姿勢を保持する用具)など
- 座面の滑り止めや体幹や下肢を支えるベルトなど
- 書見台、書写用のボード(見やすい、書きやすい姿勢を維持するための用具)など
- 特になし
- その他

4-5-3 意思の表出を明確にするための補助具や補助的手段で活用しているものをお答えください(複数回答可)。その他の場合は、具体的に記述してください。[必須]

- 写真や絵カードなど
- 文字盤
- 音声出力型のコミュニケーション機器
- パソコン(入力装置の工夫を含む)
- 特になし
- その他

4-5-4 筆記をしやすくするための補助具や補助的手段で活用しているものをお答えください(複数回答可)。その他の場合は、具体的に記述してください。[必須]

- 筆記具に補助具をつける
- 用紙を滑りにくくしたり、大きなマス目や罫の用紙を使う
- パソコンのワープロソフトを使う(入力装置の工夫も含む)
- 特になし
- その他

4-5-5 上記以外で障害による困難を軽減するための補助具や補助的手段で活用しているものがありましたら、お答えください(自由記述)。

5. 肢体不自由特別支援学級で指導する教員としての意見をうかがいます

5-1 児童生徒の実態や障害特性の把握について

5-1-1 児童生徒の実態や障害特性を把握するために活用している方法をお答えください(複数回答可)。その他の場合は、具体的に記述してください。[必須]

- 心理検査や発達検査の結果からの読み取り
- 医師や理学療法士、作業療法士、言語聴覚士などの専門家の意見の聞き取り
- 就学前や前年度担任による引き継ぎ資料(個別の支援計画、個別の指導計画を含む)からの読み取り
- 保護者からの聞き取り
- 複数教職員による観察と協議
- その他

5-1-2 児童生徒の実態や障害特性を把握する際に、もし困難なことがあればお答えください(複数回答可)。その他の場合は、具体的に記述してください。[必須]

- 客観的なデータがとれない。
- 相談できる専門家がない
- 障害特性に応じた指導についての情報が得にくい
- 使いたい補助具や補助的手段が手に入らない
- 特になし
- その他

5-2 児童生徒の「表現する力」を育むための工夫について

5-2-1 児童または生徒の「表現する力」を育むために工夫していることをお答えください(複数回答可)。その他の場合は、具体的に記述してください。[必須]

- 時間をかけて本人の発話や意思表示を促し、待つ。
- 補助具などを活用し、本人のできる力を最大限に発揮させる
- 体験的な活動を多く取り入れる
- 習熟するまでくり返し学習を行う
- 複数の教科等を関連させて指導の重点化を図る
- 児童生徒の興味関心をひくような教材を使う
- 特になし
- その他

5-2-2 上記の設問で選んだ工夫について、具体的にお答えください（自由記述）。

5-3 児童生徒の「生活や学習における経験不足」について

5-3-1 児童生徒を指導していて「児童生徒は経験が不足しているな」と感じたことがありますか。

[必須]

ある

ない

5-3-2 「ある」と感じた方におたずねします。どんな状況(場面)でそれを感じましたか(自由記述)。

ご協力、誠にありがとうございました。

全国小・中学校肢体不自由特別支援学級の指導に関する調査

○金森克浩 長沼俊夫 徳永亜希雄 齊藤由美子 笹本健 小田亨
 (独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所) (北海道旭川養護学校)
 KEY WORDS: 肢体不自由教育 特別支援学級 指導の概要

目的

小・中学校に設置される特別支援学級(肢体不自由)の指導の実態を把握し、教科指導に関する課題を明らかにする。

方法

(1) 調査対象

平成 22 年度全国公立小・中学校に設置する肢体不自由特別支援学級(小学校 1,886 校、中学校 670 校)の学級担任。

(2) 調査手続きと期間

質問紙及び回答方法を郵送し、当研究所のアンケートサーバーを使用してインターネット上で回答する方法、または、FAX で回答する方法を用いた。調査期間は、平成 22 年 11 月 1 日から 11 月 30 日であった。

(3) 調査項目

①. 学校・学級の概要

a. 設置する特別支援学級及び通級による指導教室と在籍(または、通級)する児童生徒数

②. 肢体不自由特別支援学級の概要

a. 肢体不自由学級に配属される教職員等

b. 肢体不自由特別支援学級が開設されてからの年数

③. 肢体不自由特別支援学級に在籍する児童生徒の実態

a. 日常的な会話(やりとり) b. ひらがなを読むこと

c. ひらがなを書くこと d. 移動する方法 e. 食事について f. 排泄について

④. 肢体不自由特別支援学級に在籍する児童生徒の学習の状況

a. 児童生徒が学習する内容 b. 交流及び共同学習の状況

c. 自立活動の指導 d. 教科書や副教材の使用

⑤. 児童生徒の障害の実態に合わせた補助具や補助的手段の活用

a. 移動のための補助具や補助的手段の活用 b. 姿勢を安定させるための補助具や補助的手段の活用 c. 意思の表出を明確にするための補助具や補助的手段の活用 d. 筆記をしやすくするための補助具や補助的手段の活用

⑥. 肢体不自由特別支援学級で指導する教員としての意見

a. 児童生徒の実態や障害特性の把握 b. 児童生徒の「表現する力」を育むための工夫 c. 児童生徒の「生活や学習における経験不足」

結果

回収率は、小学校 55.9%、中学校 49.3%であった。

本稿では、教科学習に関係の深いと思われる以下の項目について報告する。

(1) 肢体不自由特別支援学級に在籍する児童生徒の実態

「日常的な会話ができる」が小学校 69%・中学校 81%、「ひらがなの文書を読める」が小学校 67%・中学校 84%、「ひらがなで文が書ける」が小学校 58%・中学校 79%であった。

(2) 肢体不自由特別支援学級に在籍する児童生徒の学習の状況

①. 児童生徒が学習する内容

「当該学年の教科を中心に学習」が小学校 48%・中学校

50%、「下学年の教科や知的障害特別支援学校の教科等を中心に学習」が小学校 20%・中学校 29%、「知的障害特別支援学校の教科、領域を合わせた内容を中心に学習」が小学校 14%・中学校 8%、「自立活動の指導内容を中心に学習」が小学校 18%・中学校 13%であった。

②. 教科書や副教材の使用状況

小学校、中学校ともに同様の傾向で「当該学年の教科書と副教材」が 47%、「個別に作成した副教材が中心」が 22%、「下学年の教科書と副教材」が 13%、「学校設置者の定める教科書用図書」が 8%、「特別支援学校知的障害者用の教科書」が 3%、「デジタル教科書や拡大教科書」が 3%であった。

(3) 児童生徒の障害の実態に合わせた補助具や補助的手段の活用

①. 姿勢を安定させるための補助具や補助的手段の活用

「机やいす(市販品、手作りも含む)」が 59%、「座面の滑り止めや体幹や下肢を支えるベルトなど」が 25%、「クッションチェアやプロンキーパーなど」が 22%、「書見台、書写用のボードなど」が 16%、「特になし」が 30%であった。

②. 意思の表出を明確にするための補助具や補助的手段の活用

「写真や絵カードなど」が 23%、「パソコン(入力装置の工夫も含む)」が 7%、「文字盤」が 5%、「音声出力型のコミュニケーション機器」が 5%、「特になし」が 70%であった。

③. 筆記をしやすくするための補助具や補助的手段の活用

「紙を滑りにくくしたり、大きなマス目や罫の用紙を使う」が 36%、「筆記具に補助具をつける」が 25%、「パソコンのワープロソフトを使う」が 11%、「特になし」が 47%であった。

(4) 児童生徒の実態や障害特性の把握する際に困難なこと

「障害特性に応じた指導について情報が得にくい」が 46%、「客観的なデータがとれない」が 20%、「使いたい補助具や補助的手段が手に入らない」が 17%、「相談できる専門家がない」が 13%、「特になし」が 34%であった。

(5) 児童生徒の「表現する力」を育むための工夫

「体験的な活動を多く取り入れる」が 61%、「時間をかけて本人の発話や意思表示を促し、待つ」が 60%、「児童生徒の興味関心をひくような教材を使う」が 59%、「補助具などを活用し、本人のできる力を最大限に発揮させる」が 23%、「複数の教科等を関連させて指導の重点化を図る」が 18%、「特になし」が 6%であった。

まとめ

特別支援学級(肢体不自由)には、障害の状態が多様な児童生徒が在籍するが、当該学年及び下学年の教科等を中心に学習する者が 7~8 割である。障害に応じた補助具や補助的手段の活用はされているが、担任の半数は「障害特性に応じた指導についての情報が得にくい」と感じている。このことから、障害特性の捉え方、それに応じた具体的な配慮や工夫にかかる情報を整理し、小・中学校の教員が活用できるように発信することが求められていることが明らかになった。

(KANAMORI Katsuhiko, NAGANUMA Toshio, TOKUNAGA Akio, SAITO Yumiko, SASAMOTO Ken, ODA Toru)